

# 母と娘

野田幸江



一人娘を、わが母校にと願う母親の夢がかなえられたのは、小学校入試失敗のあと六年間の母と娘のそのみを願つての闘いの末であった。「それ程、苦しいものではないりませんでした。本人も結構成績のあがるのを楽しんでいた様です」という母親の言葉にもまんざらのうそは感じられなかつたし。

礼儀正しい母親の物腰には、いかにもしつげの行きとどいた娘時代を彷彿とさせるものがあつた。事実、母親が完全とも思える自分の母に對しいだいた、あこがれにも似た尊敬の念は、三児の母親となつた今も

なお変ることなく続き、何か迷う事があれば誰よりもまず母に相談し、その解決策はいつも満足すべき効を奏したという。

そんな母にすめられるままに嫁ぎはしたものの、そこで出会つた夫は、事々に母親の常識を超えた考えの持ち主であり、この父親にまかせておくことは出来ないといふあせり、不安、いらだちが母親の気持を一層勢いこませ、娘に對する支配となり、「人には迷惑をかけぬ様」「自分の事よりも相手のことを考えて」という子どもにとつては、苛酷すぎるとも思える要求となつて現われたようである。

そんな母親の教えを素直にとり入れ、むしろ自分の作品として誇りさえ持っていた娘が、「もつとスマートになりたいから」と野菜ばかり食べる様になつたのは、中学一年の二期期の始め頃であつた。そして「私にもそんな事があつた」と娘らしさの現われとむしろほほえましく思いながらも、「作つてくれる人に悪いと思わないの」と注意する母親であつたという。しかし、いつもの素直さはどこへやら頑強に節食、すっかり細くなつてしまつた体をなお且つ痛めつけるかの様に過激な運動をし、夜遅くまで勉強しているわが娘の姿に不安をいだき、相談室を訪れたのは、もう二期期も終ろうとしていた時であつた。スマートさ等通りこしてしまつた瘦身に驚きながらも、平静を装つて学校の事、友達等の事を話しかけても口は真一文字に堅く結ばれたまま、そこには食べる事も、話す事も、その働きの

一切を拒絶した口があるだけであった。

「食べる」それは自分にとって必要なものをとり入れる事であり、「話す」それは自分にとって必要なものをき出す事ではないか。もしそうであるならなぜ、その働きを放棄してしまおうとしているのか。もしかして働きのやめてしまっているのは口だけでないのではないか。そんな疑問をなげかけている口がそこにあった。

幼ない時からの母親の一方的なしつけは、自分というものがまだはっきりしていない時代には、それに従うことに何の疑問も、脅威も感ずる事はなかったどころか、むしろ良い子としての評価は自分自身を満足させるものであっただろう。しかし、そんな満足が続かなかつたところに、今回の問題が起り、それは彼女の人間としての成長を示すものとも考えられた。

受験という一つの目的を果たした時、彼

女の思春期は一気にその本来の活動を開始したようである。「母のいいなりになって

いた自分とは何であったのか」そんな疑問に答えられない自分。母の人形でしかなかったのではないかという焦燥、その壁は、今まで自分で考え、自分で行動してみる事の少なかつた彼女にとっては、あまりにも大きく、厚いものであった様である。人形にはなりたくない、ざりとて解決の道は探す必要も、乗り越す必要もない。

今までの人形の生活へのたちがたい執着、そんな心の葛藤とは裏腹に体だけは着実に大人になって行く。それはますます彼女を混乱させるものであったのだろう。そしてそれをのり切る事が大人になるという事であるのなら大人になる事をやめてしまおうと考えたのではないか。

大人になる事をやめる、それは成長を意味する「食べる事」の拒否となって、その

事を訴えているのではないか。それは、更に、支配的であり、分身でもあった母親に対する自分自身を傷めつける事の反抗でもあったのだろう。

三か月余の入院の後、彼女は突然に食べ始めた。「どうして今まであんなに食べられなかつたのか！、バカみたい」という言葉を残して退院して行った。

そして、「やたらに食べたくなって」という言葉と一緒に、名のられなければわからない程に、まるまるとふとつた彼女に会ったのはその一か月後。更に六か月後、均整のとれた彼女に会った。そこには、ごく自然なかたちで自分自身を受入れている彼女の姿があった。そして、それは私にとって食べる事が体の成長維持を支えると同時に、心の成長とも深くかかわっている事を教えてくれる貴重な一つの体験でもあった。

(日本総合愛育研究所)